（書評）

宮崎市定著　東洋的近世

東洋史に於ける時代区分の問題、とくに近世をいづれの時代より始めるかについて、種々議論が盛に行われているが、宋、十世紀以後を近世とする内藤湖南博士の説を継承する宮崎博士が、広い視野と深い学識と、着実なる論理とを以て、世界史的立場より東洋近世史の本質と構造とを、博士独特の軽快な筆致で明らかにしつゝ、一面において、宋近世説の反対論に一矢を報い、他面、世界史の体系につき西洋史偏重の非を指摘し、公式論的歴史学を批判して歴史学の任務に言及するなど、僅々二百頁の小冊子ながら、内容的には頗る巾が広く、奥行きの深い書物であつて、単なる概説的東洋近世史ではなく、世界史観的東洋近代史論である。「正史」といわんより、「史通」であり「宋論」であり、一つの史観をもつて貫いている点において「愚管抄」でもある。博士の史観―歴史発展における交通の力を重視する立場―を前著アジア史概説の中に窺い得た吾々は、今や本書を繙くことによつて、より一層明確な形に於いて、その整然たる論理的展開を目睹することが出来る。世界史的意図を以て描き出されたアジア史概説の論旨上の焦点を専らシナ近世に移動集中せしめつゝ、東洋近世のすがたを、大きな世界の、ながき、ひろき歴史の全面に、大きく浮び上がらせることによつて、東洋の文化の、政治の、社会の何たるかを、より深く、より強く、理解納得させようとする博士の大きな叫びでもある。「菩薩蠻記」以来、歩一歩、博士の、ゆるぎなき、強き足跡は、日本歴史学の今日の分野と動向とを予知せるかの如く、世界史体系樹立の道に基礎工程を印することここに七星霜。東洋的近世は一面に於いて、その世界史学理論の中間報告でもあり、副次的には歴史学方法論の一応の結論でもある点において、軽々に取扱いがたき質的重量感にあふれている。また一面、本書は内藤博士の宋近世説をひろき、あつき世界史的論拠を以て、強く逞しく肯定せんとするものであつて、その点、遠く内藤史学批判の声に応えるものでもある。

アジア史概説に発し、東洋的近世に於て成熟せる博士の世界史学理論は今や完璧にすら近い。それは鮮やかに現今の世界史体系上の盲点をきれいさつぱりと、取り除いてくれる。古代統一、中世分裂、近世再統一と観するたてのつらぬき（八頁）東西二つの世界を一つに結ぶ「ベルト附き輦車」の構造（二〇六頁）のうちに作用する生々しいよこへのちから――ベルトそのもの、すなはち交通を重視する独特の史観を具現して、見事なまとまりを見せている。

博士の歴史的立場は、歴史の進行に於て必然的なるシュトウフェンを認める思想、たとえばマルクス主義的段階学説、原始共産制から、亜細亜的、古代的、封建的、資本主義的を経て共産主義制への段階の必然的継起の学説を否定する。博士に従えば、歴史学の任務は先入感的に世人の歴史意識を支配せる諸々の枠―公式―の検討にあり、更に新しき公式の絶えざる探求にありとする（二頁）

博士の宋近世説肯定の論拠は結論東洋近世

史の意義とくに二二頁―二五頁に於て、だめ押し的に強く展開され、該説否定論者の持ち出すヨーロッパ的近世の概念が、実は産業革命以後の資本主義全盛の最近世史的概念を以つて厳酷に東洋を律しようとする見当ちがいを突込んでいる。（博士は産業革命以後のヨーロッパを最近世史とすることを提唱する。二〇五頁）

東洋近代の社会と文化とが、決して西欧のそれに後進するものではない、否、宋十世紀に続く元明清の文化は西欧十四世紀のルネサンスに先行するとする博士の持説が、ここでも繰返えし強く主張される。曰く、西欧が他の地域に魁けて最近世の段階に到達したのはルネサンスの内在的発展性とイギリスの産業革命とフランスの政治革命を通過した為で、極めて短時日の間に近世史を卒業し、急速に高昇飛躍せる指導的地位から無反省に他の世界を眺め、それを過去に遡つて類推した結果、種々の誤解を生じ、東洋人自身の見方も之に誘惑されるのだ。西洋よりも早く開始された東洋の近世を遅しく否定する前に、一度びマルコポーロの地位に立つて元代のシナを見、マテオリッチの身になつて明代の社会を観察して貰いたいと。（二二五頁）

東洋の精神文化、西洋の物質文明の一般的通念は、博士の次の如き見解によつて修正の要が認められる。曰く、十世紀以後のシナは既に資本主義的段階に突入し、ナショナリズムは全アジアを風靡していた。シナの大運河は東西文通の東端における一大廻廊の役割を果し、海外貿易は繁栄し、商業は発展し、通貨量は飛躍し、農業生産は商品化し、都市はヨーロッパ近代のそれと通ずる觀態に於て一変し、且つその富力は増大し、生産工業は分業化していた（第二及第三の章）農業国シナは少くとも宋以後、資本主義的社会に進行している。成程、漸的に農民は圧倒的であつたけれども、資本はすでに商工階級の手に移行集中していた（六三―六五頁）。そこには歴然たる資本主義擁護論すら出現していた（七五頁）だから、勿論、階級闘争もあつたし、農民暴動もあつた（七四頁）しかるに、闘争が、暴動が、近代西欧の社会革命に見らるる自由と権利との獲得を告げる被圧迫階級の勝利、乃至市民社会の政治的凱歌を齎すことなく、結果に於て、単なる政権争奪のいくさと変転し、王朝交迭のいわゆる易姓革命として終結したところに、博士のいわゆる先進東洋社会の、一千有余年に亘るアンシャンレジュームの的停頓を余儀なくせしめた一つの素因が潜んでいたと見る（六六頁）。又別にシナには学芸復興も宗教改革もあつたが、内在的発展性に乏しく、しかも産業革命とフランス政治革命の如きがなかつた。そこに近代東洋の順当なる次段階への飛躍の遅延又は挫折が指摘され得るとする。

シナの学芸復興と宗教改革とは何か。商業都市の発達及びその富力増進が、西欧ルネサンス期と同様の二つの現象を惹起した。すなはち、既に大地の球形なるを知れる朱子（二百頁）をリーダーとする宋学は一種の復古運動であり（一六八頁）訓詁学の克服はまた一種のルネサンス的現象であり、仏教の指導的立場を否定した点に於て一種のレフォルムでもあつたとする（一七八頁）。次に文学の方面を見れば、宋の古文復興と白話文学の誕生―前者はルネサンス期に於けるギリシヤ語研究に相当し（一七七頁）後者は同期国民文学の

物興と通する（一八一頁）次に絵画、裸体画戦争画が東洋に発達しなかつた「手落」は認められるが、逆に風景画、印象主義の手法において、東洋は西洋に先進する（一九〇―一九二頁）東洋画は「交通」によつて西洋画に強く影響したとする（一九八頁）。

以上、本書の社会経済、政治、国民主義、文化と続く各章のそれぞれのワンカットにしか過ぎない。しかも紹介が西と東の二つの世界の先進、後進を問題にし過ぎた嫌いがあるかも知れぬ。吾々は書中の政治、国民主義の章に於て、東洋史研究上、多くの示唆深い叙述を見落してはならないだろう。

とかく東洋史といえば、難解、神秘、孤独晦渋の烙印を捺し、アジア史といえば近代人的感覚のオフリミット地区と考える傾向が未だに支配的なのは何故だろうか。これは、確かに吾々東洋史家の責任ではないだろうか。吾々の口から東洋史の危機が叫ばれたりするのは実際どうかしている。東洋史学自体の立遅れのために、東洋そのものが文化的に後進と見られるならば大変である。この事は急速的最近世史段階突入の西欧人が過去を類推して、東洋を後進的と観るのは誤解だとする博士の論理、及びそれに誘惑され勝ちな日本人の多きことと共に再思三省すべきだ。

紹介すべき事項の過多にして、批評すべき個所のあまりに少きは評者の知的貧困を告白する以外の何物でもない。だが、勇をふるつて「敢て」と「希望」との一二敢行するならば、一、社会的政治的革命の遅延乃至挫折の思想的背景を次の如く考えられはしまいか。シナにも古来民主的思想はあるにはあつた。たとえば孟子の、民貴しとなす、社稷これに次ぐ、君軽しとなす、及び明末黄宗羲の原君論にうかゞえるが如きシナ伝統上の一種の民主主義的思想の如き。だが、それはギリシヤ・ローマなど古代に発源する西欧のデモクラシー思想に於ける「権利」の観念を缺除していた為自由とか民権とかを主張する近代革命の思想的テコ入れとなり得なかつたのではあるまいか。二、巻頭にかかげられた年表の年代的区切りが曲線であるのはどう云う意味かと質問した学生があつた。三、東洋画に於ける裸体画の缺如をハウゼンスタインは着衣は社会的距離間を示し、アンデモクラチックな東洋社会に帰している。博士が単に「手落」と片付けないで、何等かの説明がほしい。四、博士はシナの最近世を清末に始ると解せらるる様で（四五頁六四頁）古代統一、中世分裂、近世再統一と、観ぜらるる博士の論理をもつてすればこの最近世を如何なる定型で説明されるかを知りたいことである。博士のたんげいすべからざる大きな構想と深い着眼と、黙々たる平素の研鑽を前にしては右はわづかに小問題中の一小問題にとどまるだろう。しかも世界史の体系は更に根本的に考え直そうと言はれる（二頁）洵に頭の下る次第である。西洋史家が西洋史の立場を超越する能わず、東洋史家が東洋史にしがみついている間は、真の世界史は生れない。世界史だと思つているのは、実は異つた二冊の本の合本にすぎない（巻頭言）の一節は、自称世界史家にとつて頗る耳の痛い言葉であるばかりか、実は東洋史の片はしを嚙つている者にとつても、厳しい叱咤の警声である。その意味に於いて、本書の論旨は、勿論、東洋史を西洋史の附属物視したがる一部西洋史家に対する、やわらかな警告的抗議とは解さないで、吾々東洋

史人の、より一層の奮起を希求する博士の力強い註文と受取たいのである。—荒木敏一—

（B6本文二〇八頁年表一、教育タイムス社昭和二十五年十一月発行、一五〇円）

牧健二著　近代における西洋人の日本歴史観

「史林」の古い読者たちは、その創刊後間のないころ、その一部に「研究の栞」なる欄があり、そこに「欧米人の書ける日本史」の紹介が永きにわたつて連載されていたことを記憶せられるであろう。（六巻四号—八巻三号）グリフィス・ナホット・マードック等欧米人の手になる日本史の新古の著作約三十種を通史、時代史、特殊史等に分つて解題せられたもので、初学者のためにはまことによい手引であつた。その筆者牧健二氏はその後専ら法制史の研究に専念せられ、周知の如く、「日本封建制度成立史」以下多くのすぐれた研究を公にせられて来たが、教職を退かれて後、再び欧米人による日本史研究の成果に注目し、その研究に没頭されつつあつたが、一昨年「西洋人の見た日本史」と題して欧人の日本発見以来、日本の開国に至るまでのヨーロッパにおける日本歴史観を詳述せられたにつづいて、今回更に「近代における西洋人の日本歴史観」を著して開国以後最近に至るまでの研究を完成せられた。

開国前のヨーロッパ人の日本歴史観は、例へばケンプエルの如く、爾後永く欧人の日本に関する知識の中核となり、またその理解を限界づけたところが多く、もとより軽視せらるべきではないが、十六世の耶蘇会士以来の伝統であるキリスト教的歴史観のためにその見方が甚だしく偏つているか、乃至は極めて乏しい、多くは二次的な資料にもとずくほかはなかつたことのために全く正鵠をはずれていて、今日のわれ〳〵にもはや多く訴えるところのものを有しないと思われるに対し、明治以後のそれはヨーロッパ側においては近代歴史学の方法が確立し、その研究が精緻になると共に、他方日本との接触が一層緊密になつてその必要とする資料を自由に蒐集することができたことによつて、その知識が著しく正確となり、然もわれわれとは全く異つた立場に立つての理解であつたが故に、往々にしてわれわれが全く見得なかつたところのものをよく把えていて、そこに単にいわゆる他山の石以上にわれわれ自身の学問的反省を促すものが少くない。即ち、彼等は概してその視野がひろく、常に世界史的見地に立つて日本の歴史をながめ、彼等自身の歴史との比較によつてその性格を限定しようとするに反し、わが方にあつてはその見るところが常に国史のみに限られ、単に内からその特殊性を説くに過ぎなかつたばかりでなく、最近に至るまでは政治的、社会的制約が強く、学者が真に自由にその見るところを公にすることを憚つたがために、その歴史観が兎角偏狭固陋に陥り公正を缺くところが少くなかつた。

この点の反省こそ学問の本道への復帰であり、新しい時代の要請であると考えた著者は、それ故に西洋人の日本歴史観を説くに当つても、単にさきの「研究の栞」の場合のように個々の著作について解題的な内容紹介を試みるのではなしに、それらの著作の根柢に